



4th joint seminar of JST and STM

研究成果発信の新しい方向性： オープン化が向かう先

*Trends in new forms of disseminations
of research results :
where the open activity goes to*

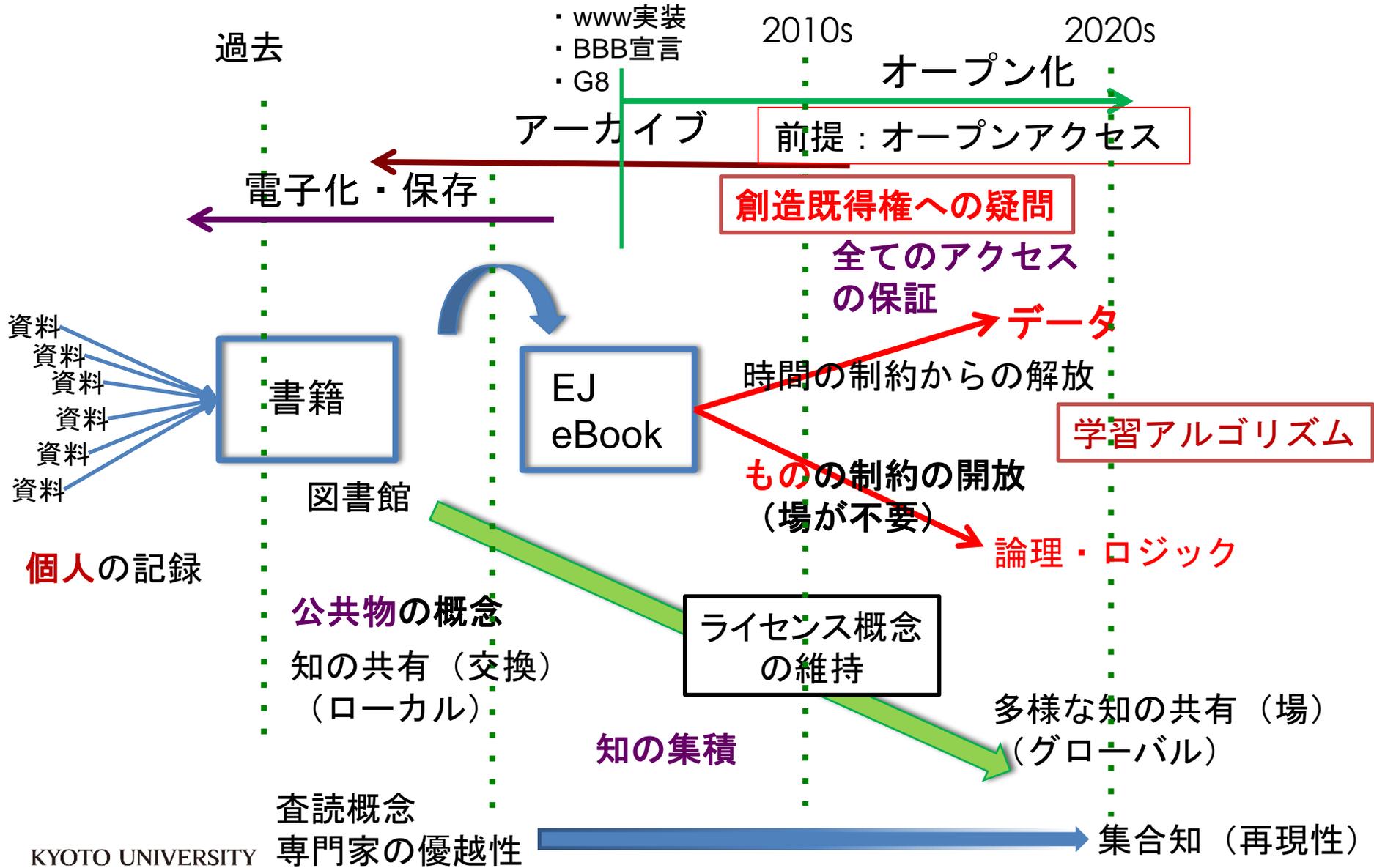
引原隆士

京都大学図書館機構長

Takashi HIKIHARA

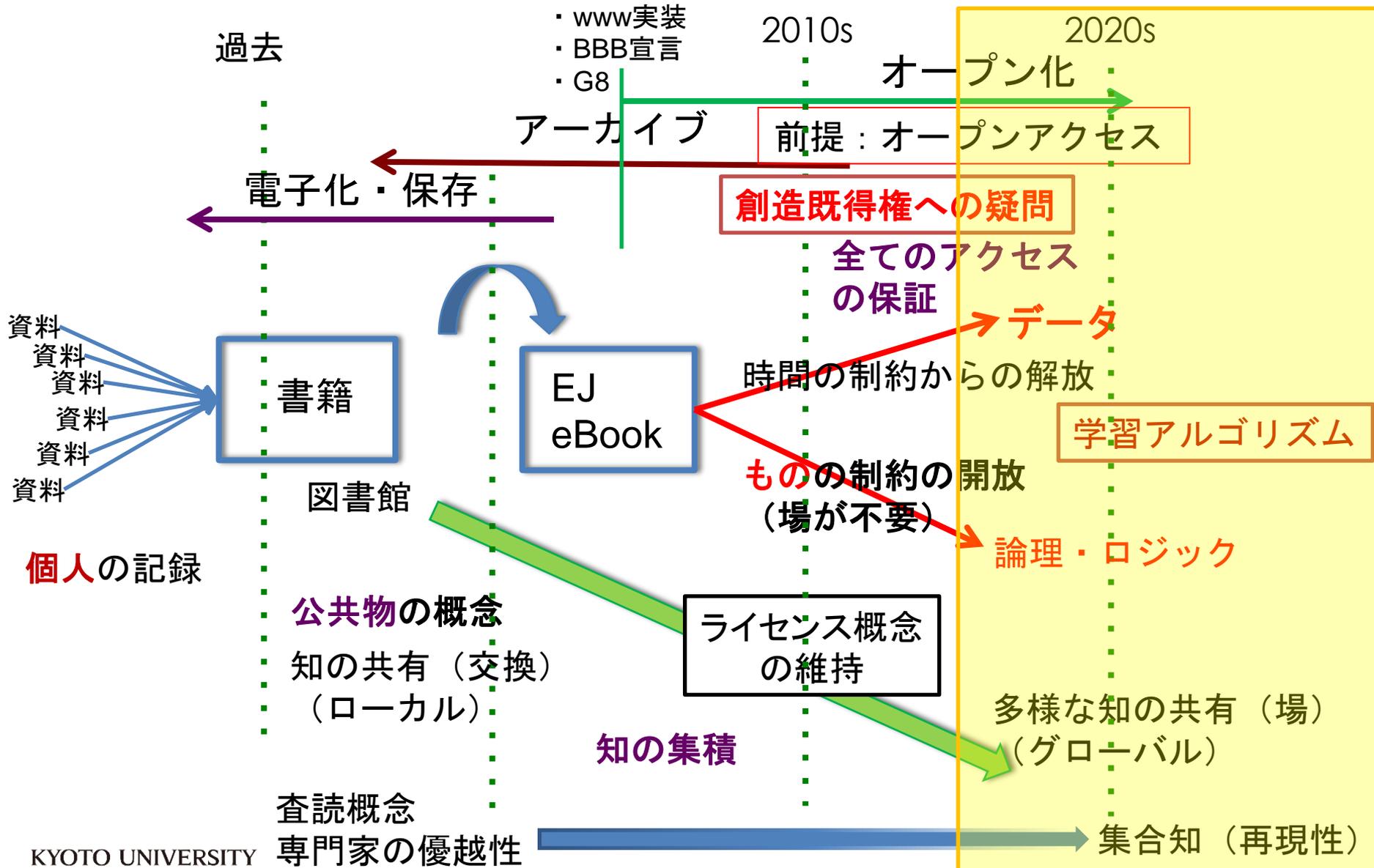
Director of Kyoto University Library Network

学術情報をめぐる変遷

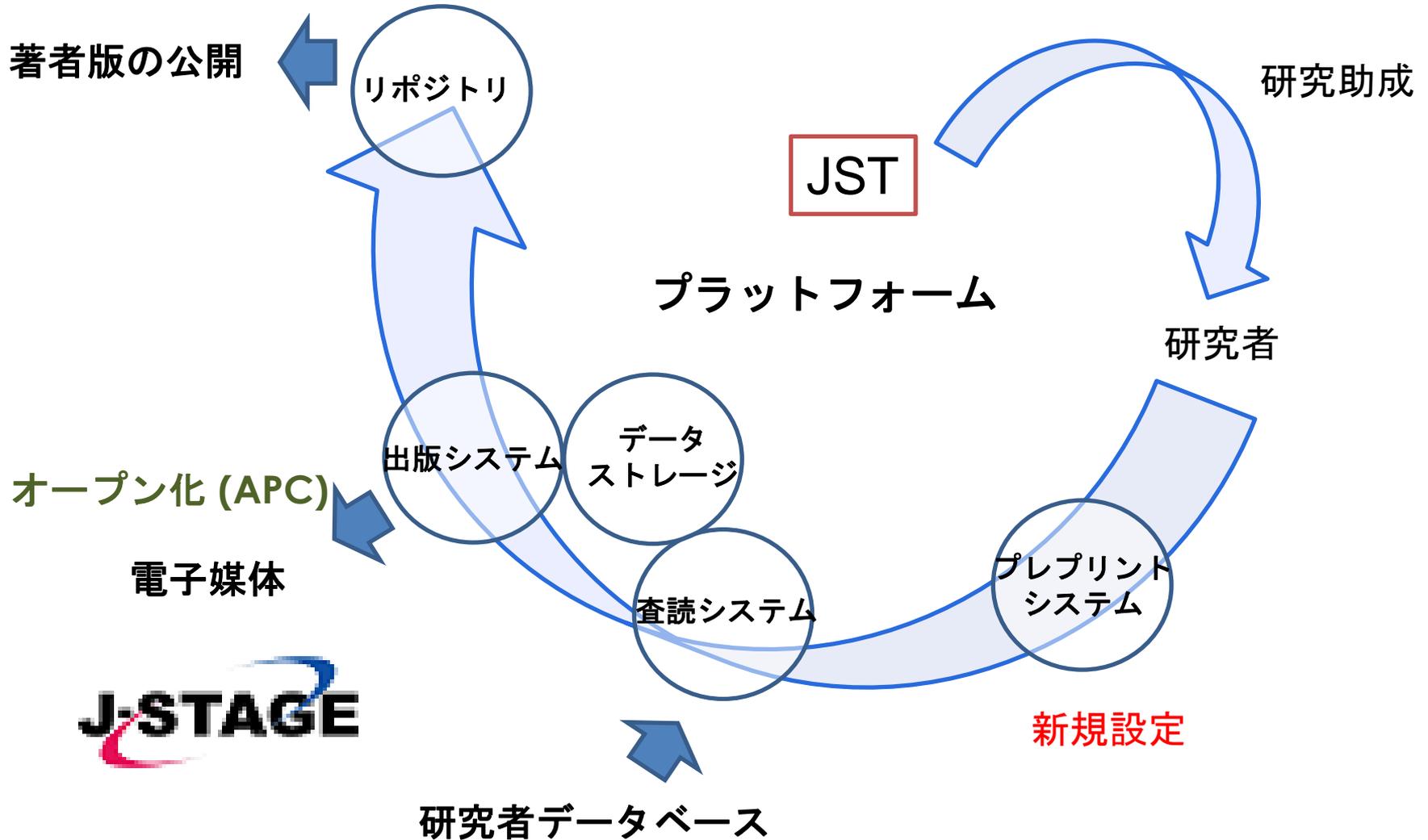


学術情報をめぐる変遷

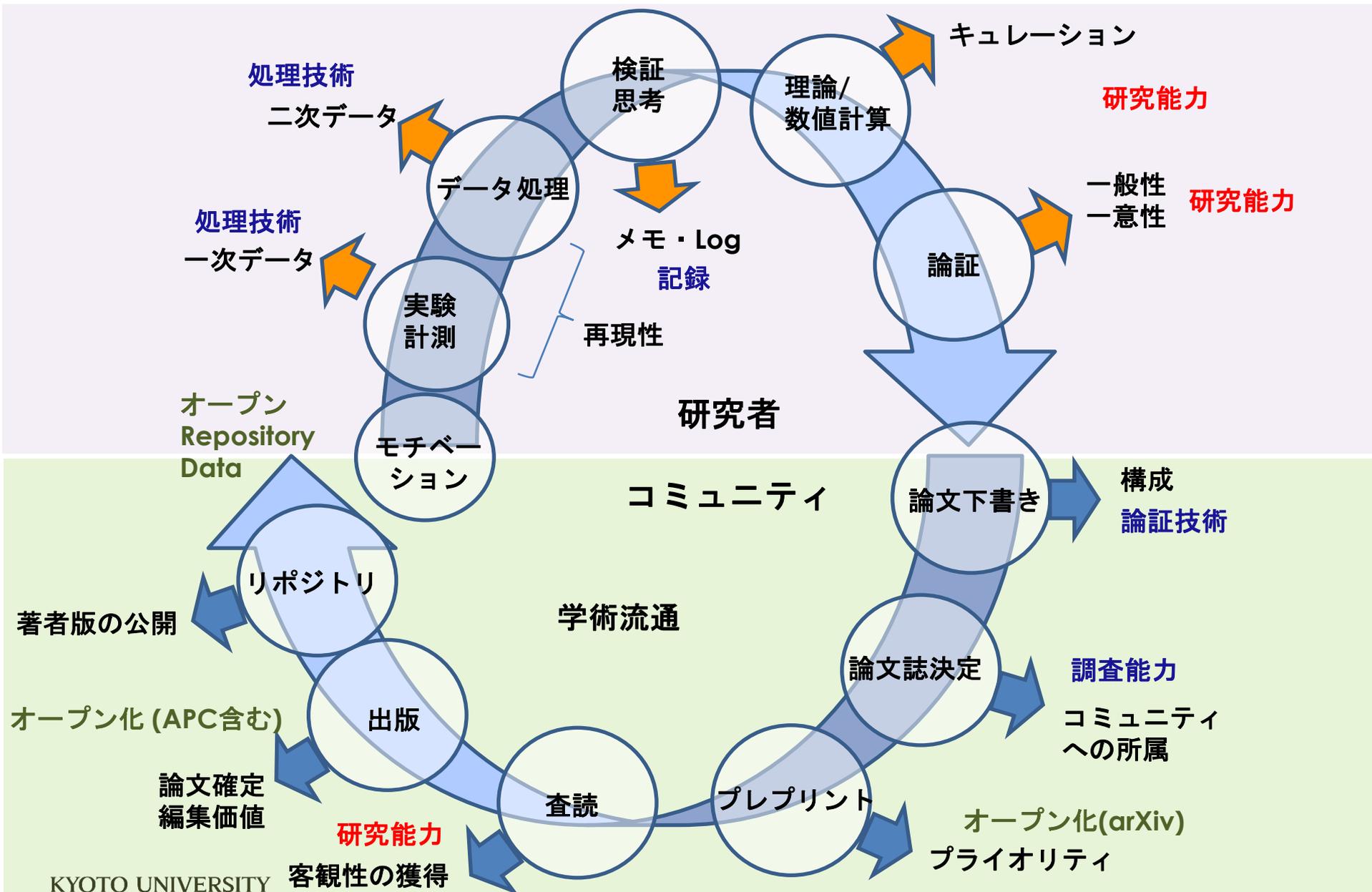
本日の議論のターゲット



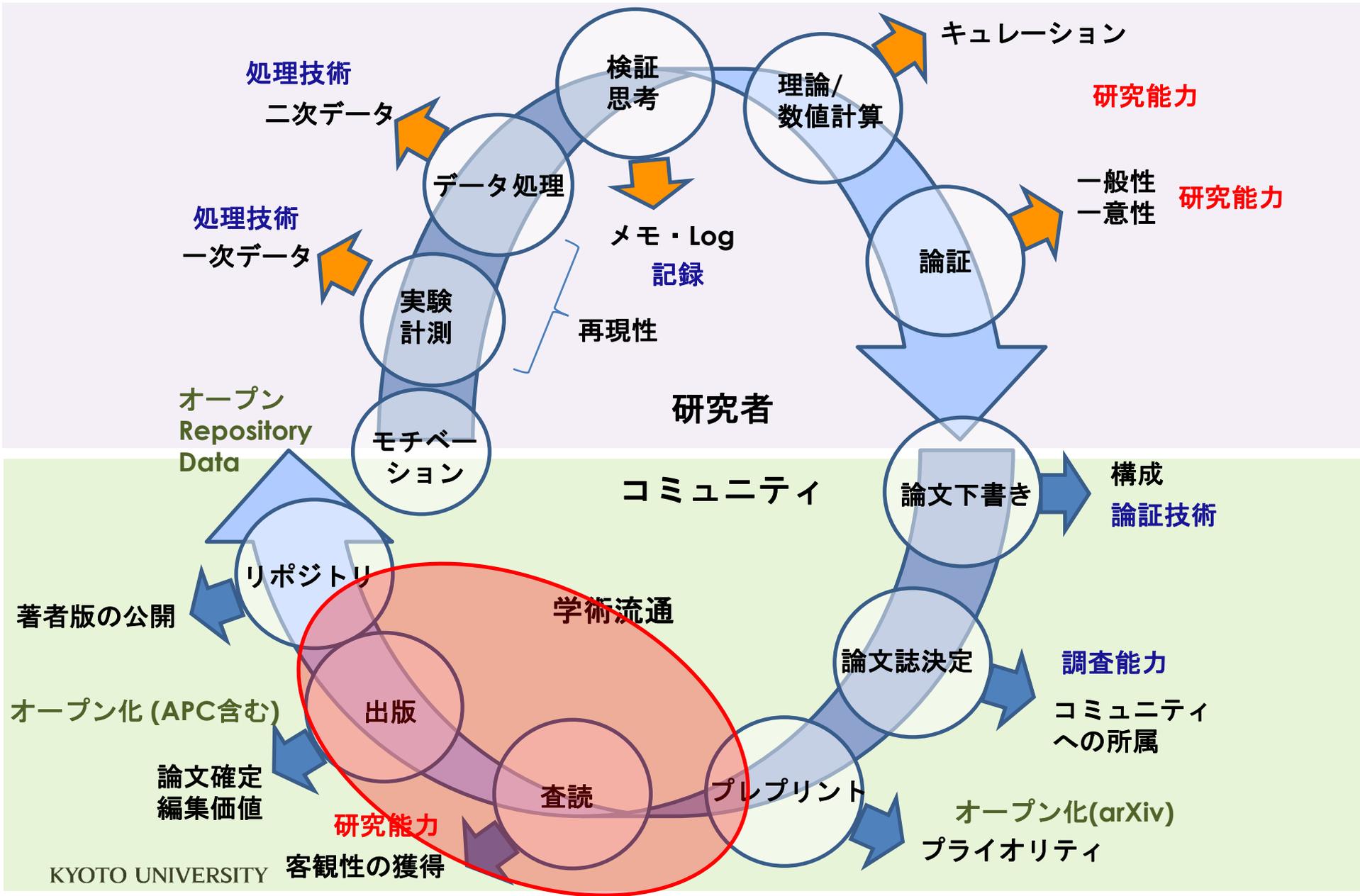
J-Stage 事業と学術流通



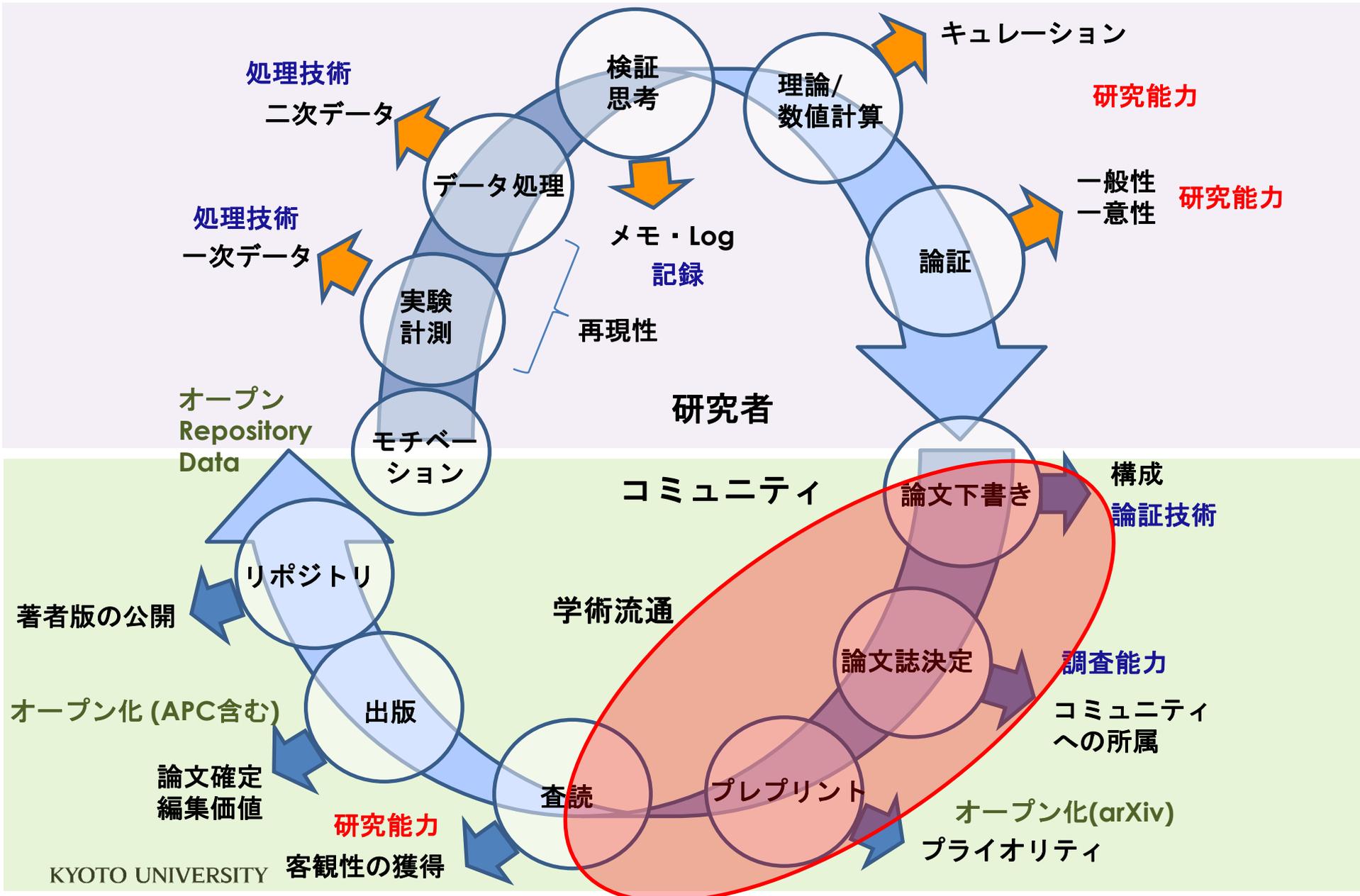
研究のライフサイクルと学術情報流通



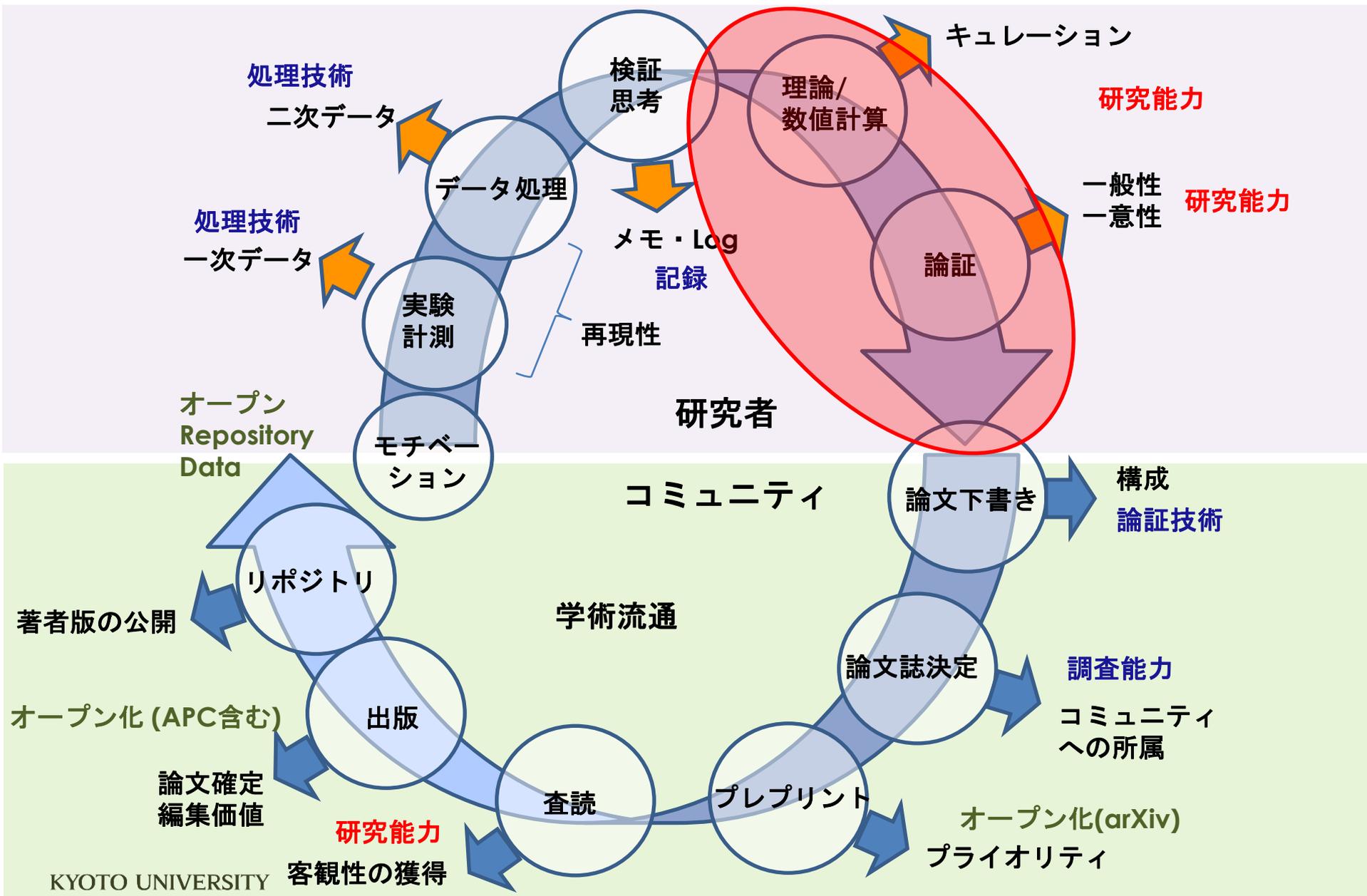
研究のライフサイクルにおける伝統的ジャーナル出版



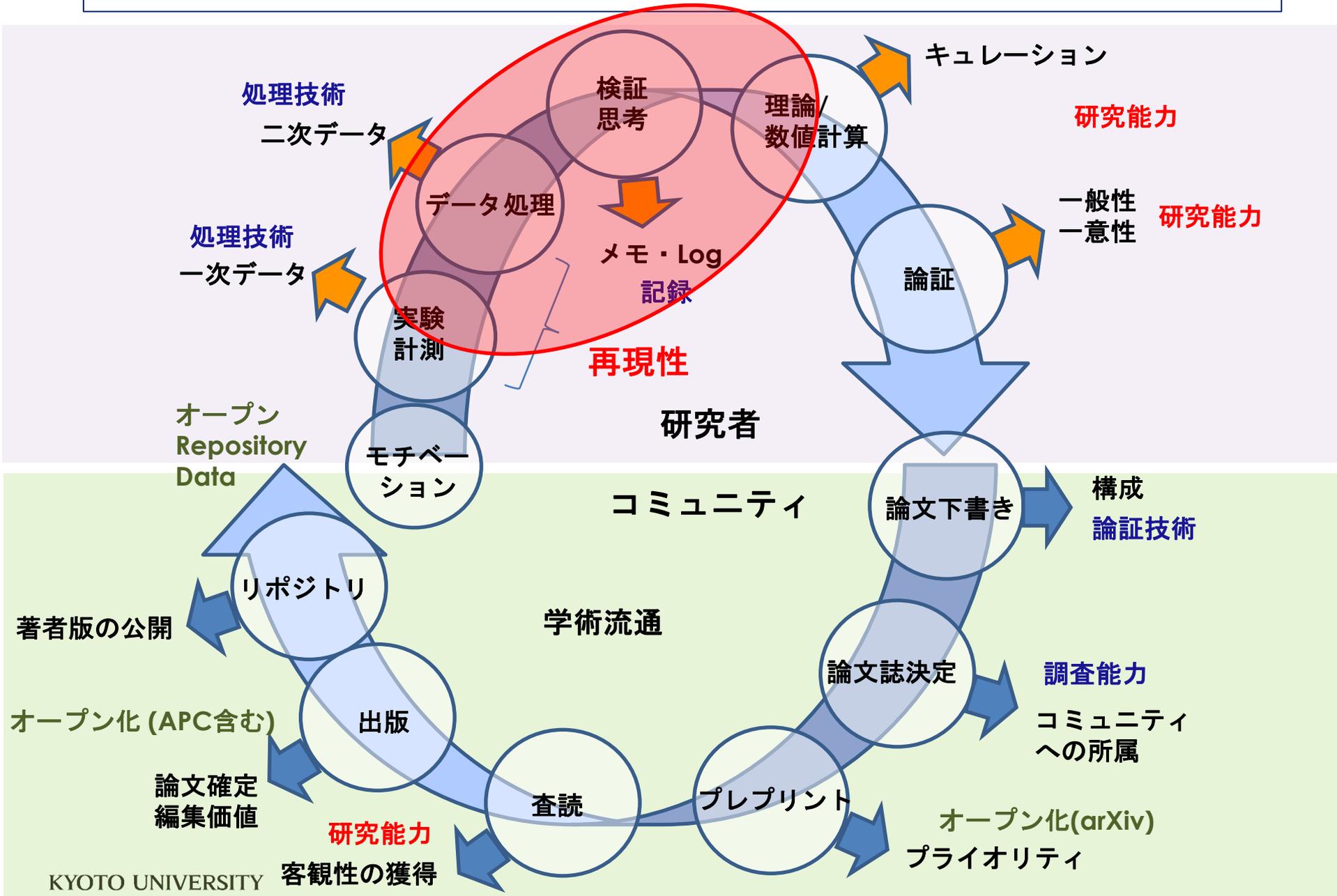
研究のライフサイクルにおけるプレプリントの位置づけ



研究のライフサイクルにおけるデータジャーナルの位置づけ

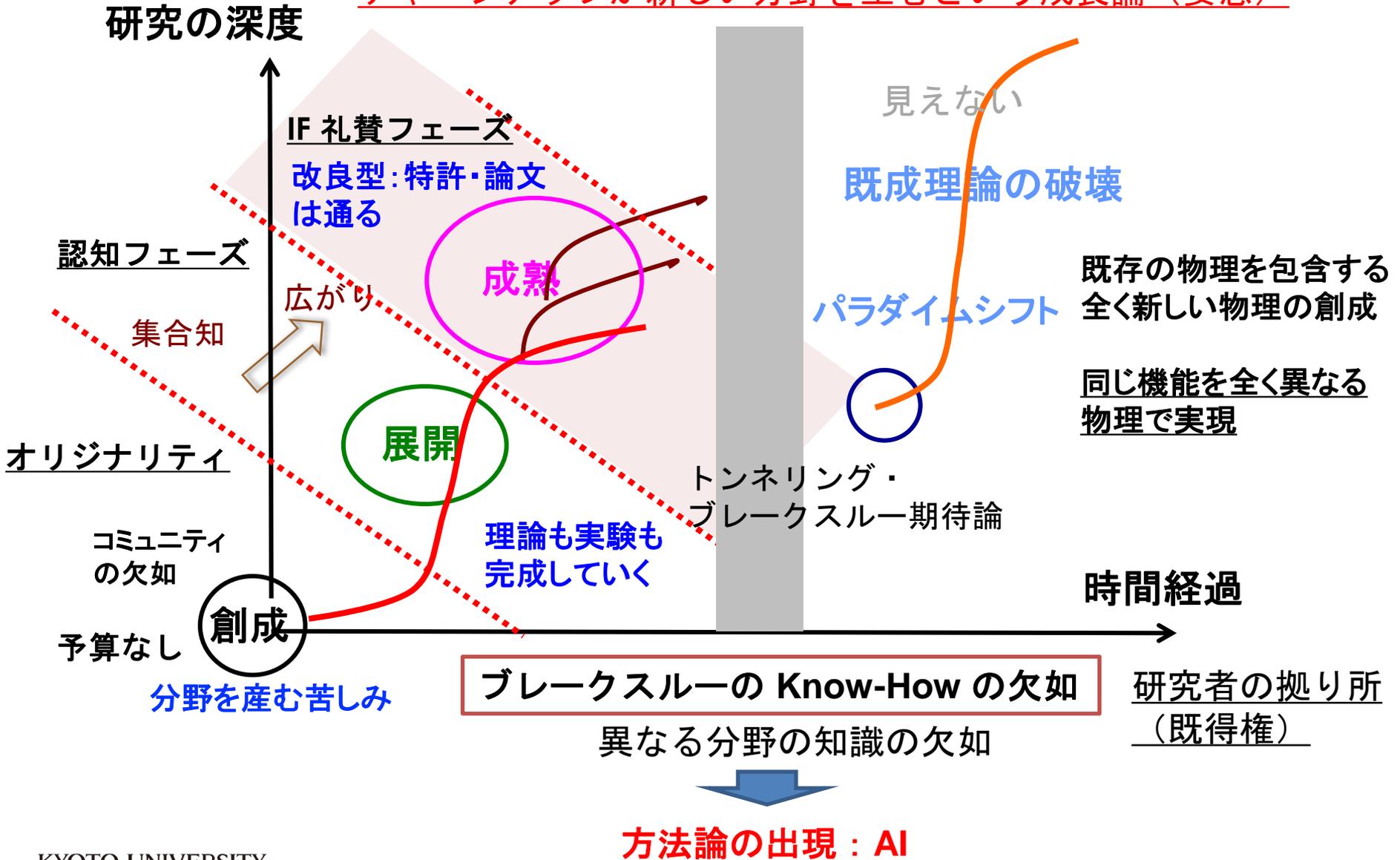


研究のライフサイクルにおけるオープンデータの認識



研究者が求める・求められてきたこと

チャージアップが新しい分野を生むという成長論 (妄想)



COVID19におけるケース・スタディ

- Review の流動化
- 読者の拡大
- 評価 (Review) と評判 (Reputation)
- 迅速性と商品化スピード
- 知識の消費

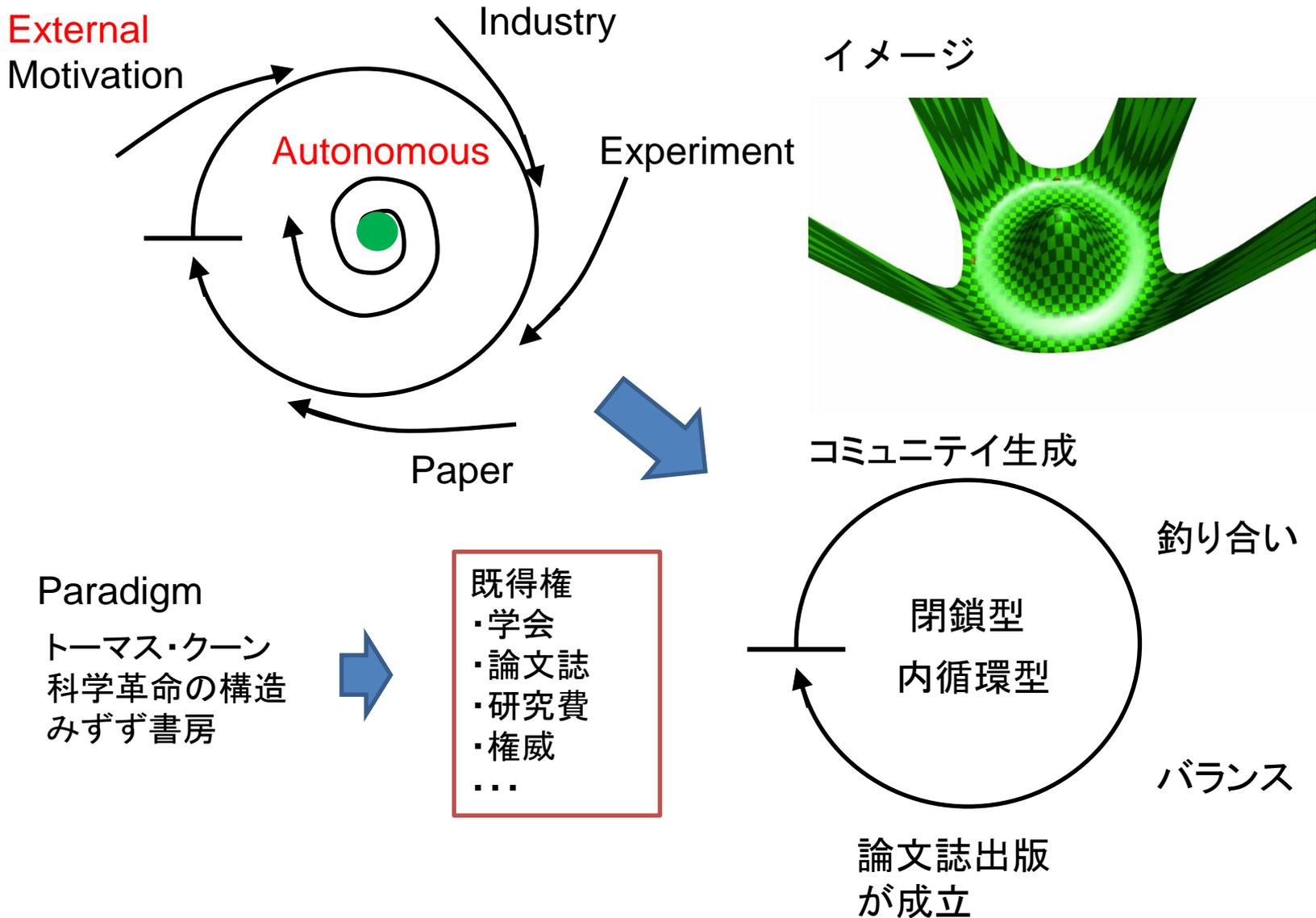
アカデミアプロセスの既得権への疑問

学術情報の選別基準 (キュレーション) の混乱

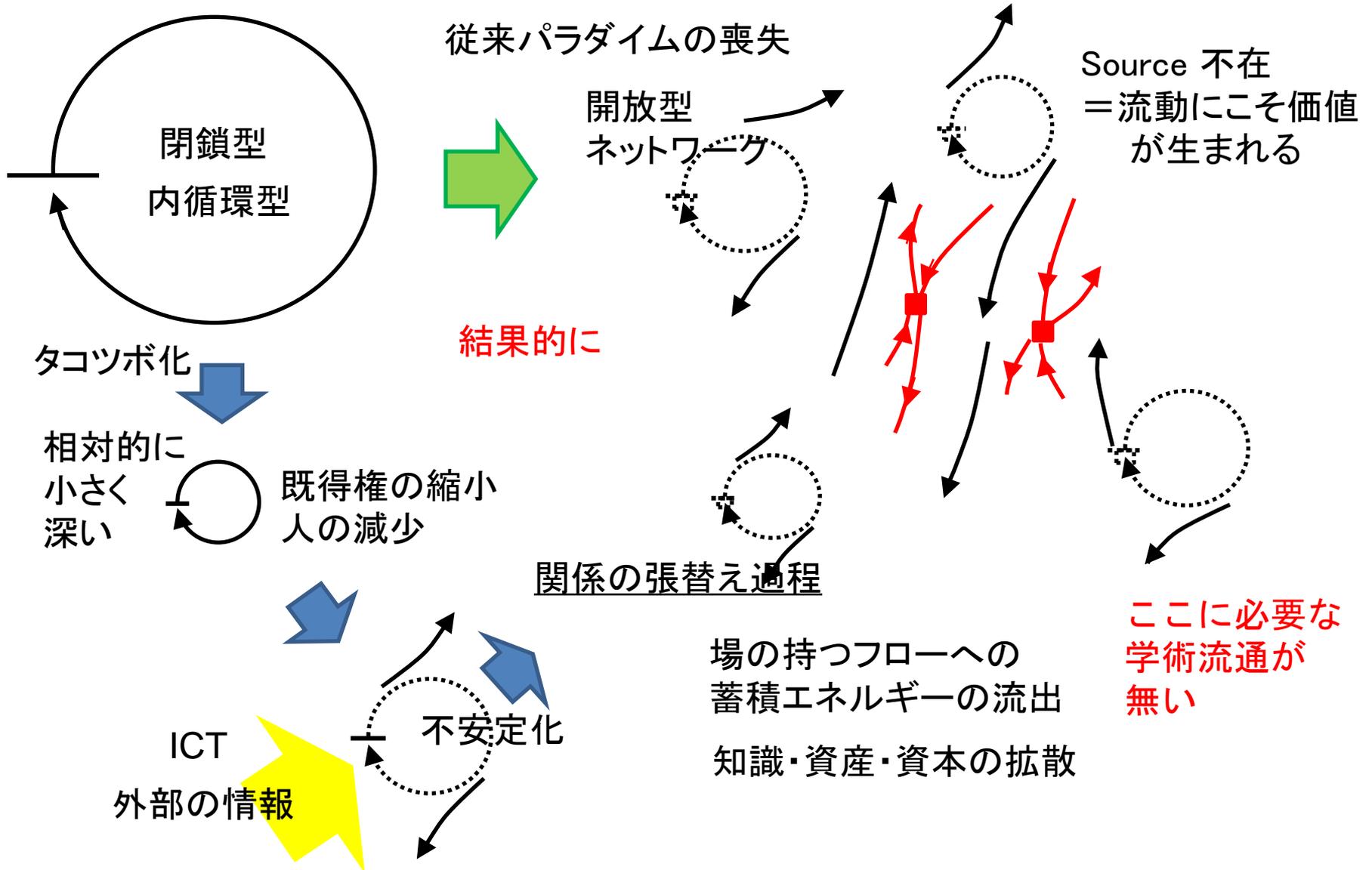
各分野で基準が変わっていないが...

場 (フィールド) を維持する学術情報の常識が
消失 (時間・空間・保存の意味で)

従来型研究のパラダイムの形成

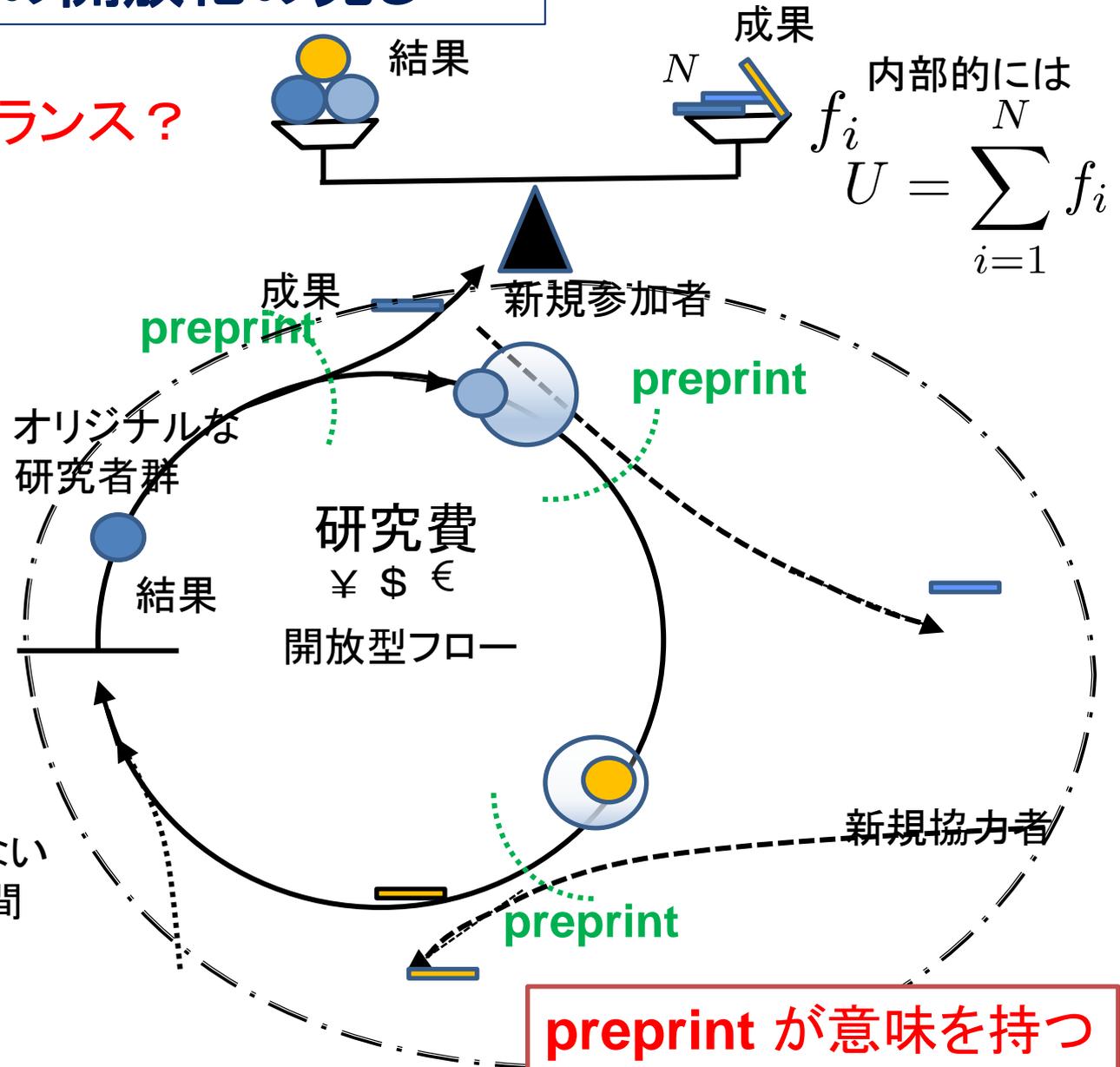


研究の流動化: 競争のグローバル化



コミュニティの開放化の兆し

トータルにはバランス？

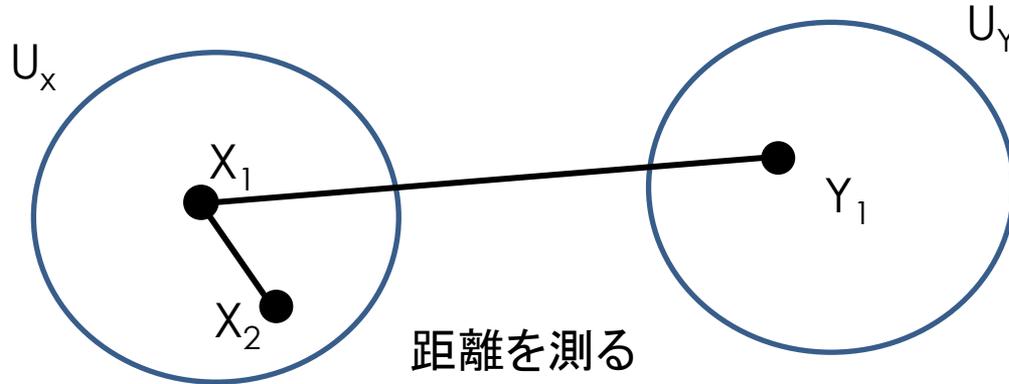


- ✓ 結果が内部循環しない
- ✓ 時間の同期は短時間
- ✓ 外部へ流出
- ✓ 論文は次の分野へ

再考

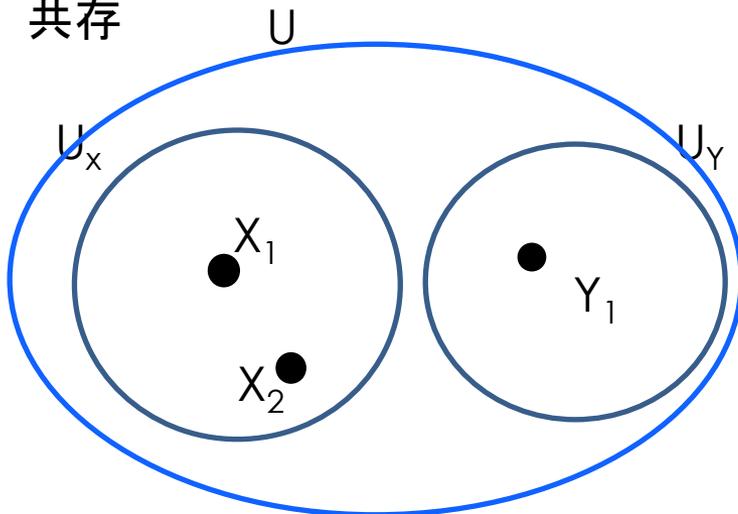
学術情報：閉鎖した世界観(評価の固定化)

査読
Review

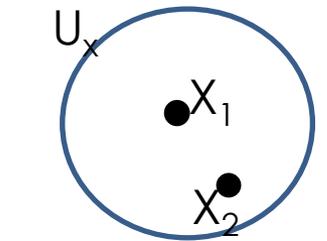
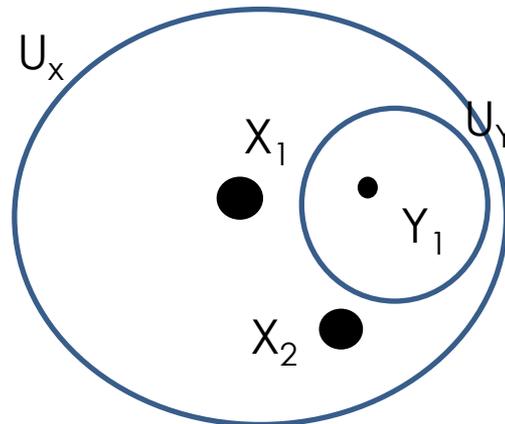


同じ空間にいることが前提(絶対距離)

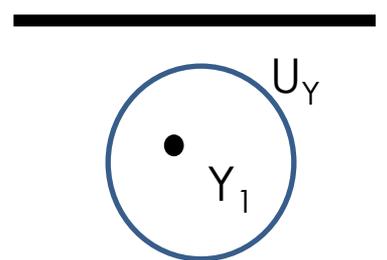
共存



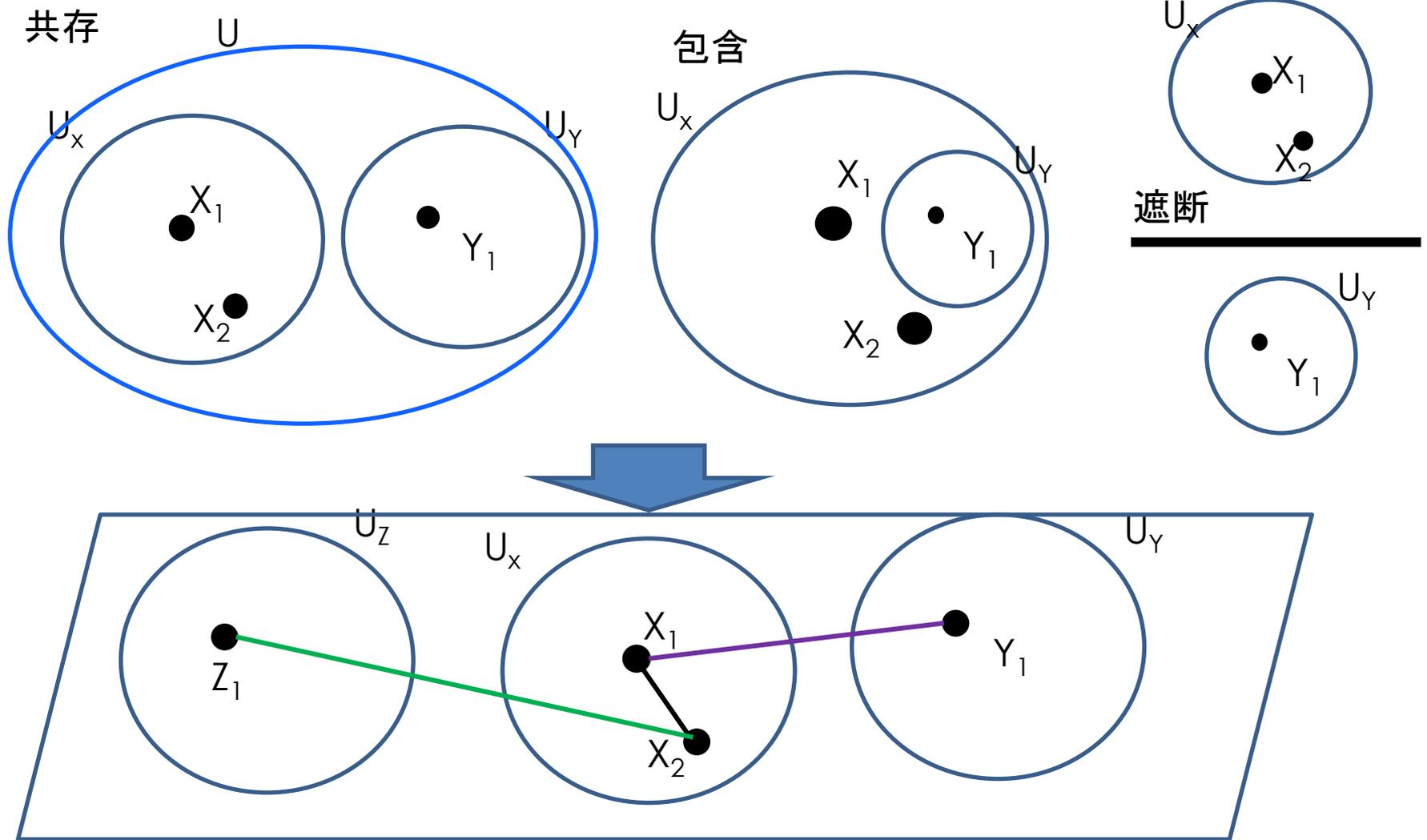
包含



分離



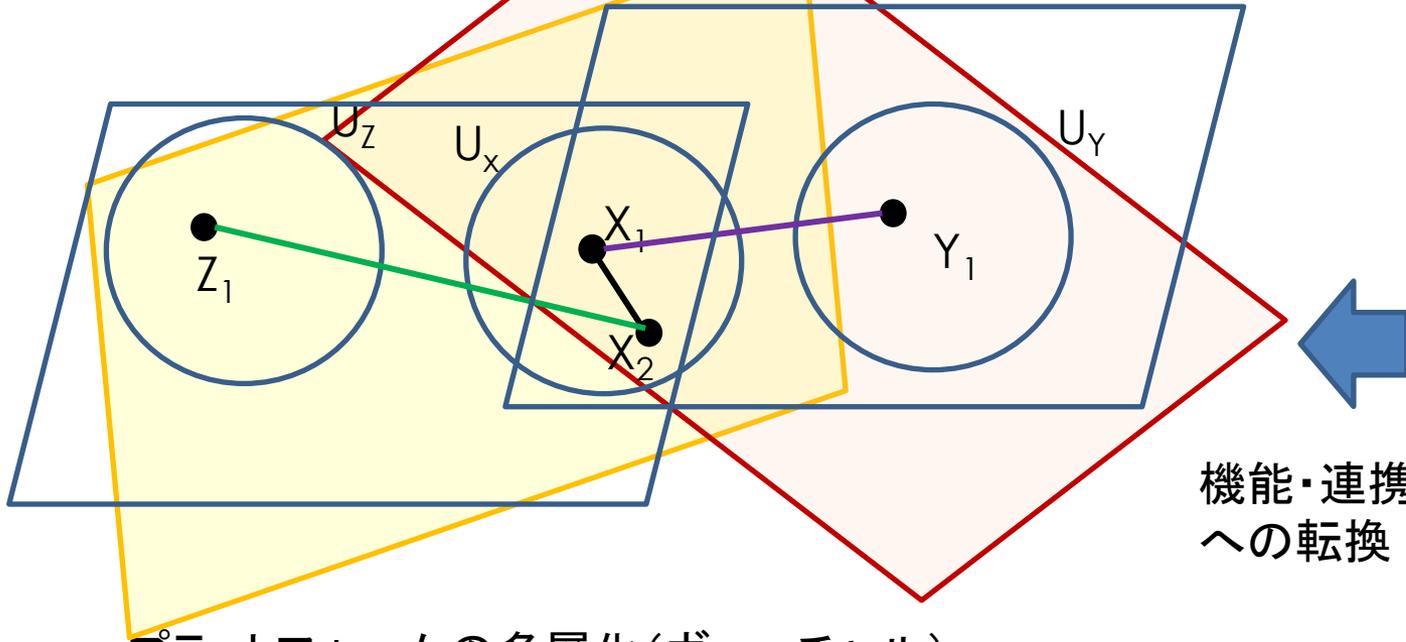
学術情報：開放された世界観(過渡的な流動化)



分野を超えるのためのメジャーと要素を示す
ネットワークをプラットフォームに実現する

方向性: 多様な世界観を支える学術流通

プラットフォームによる複合的なコミュニティ内の情報共有



国
学会
大学
図書館
研究所
専攻・学部
研究室
社会
...

機能・連携
への転換

プラットフォームの多層化(ヴァーチャル)

距離の概念と評価を明らかにした学術の評価
多様な概念の複合性を評価するための必要条件

言語ではない!

多様な分野との融合(距離を活かす)を可能にする学術流通
(共通基盤の再定義の必要性)

学術の目指すべきフェーズ：メトリックを超えて

研究活動：研究のアカデミックデータそのもの

- ・ 論文における関連分野への展開 （研究者の経験・感性）
- ・ 過去の成果から将来への展開 （研究者の経験・創造力）
- ・ 引用論文との距離の表示 （論文イントロの妥当性）
- ・ 学術空間における位置表示（同上）
- ・ 引用研究者間の距離の表示（同上）

- ・ 査読者の整合性，分野，能力の表示
（査読プロセスの正当性，オープン査読）
- ・ IF向上恣意性の評価 （出版プロセスの正当性）
- ・ 購読経費，APCの透明化
（各論文誌利益率の透明性）

- ・ 論文と知財の二重構造の解消 （既得権の打破）
- ・ フェアユースの国際協約 （既得権の打破）
- ・ 言語の壁の解消 （共有基盤の言語から論理への転換）

- ✓ 自らが既得権を甘受し，放棄した権利で他者が益を受けるのは，市場の理である.
- ✓ 研究者が主体的に動かなければ，研究のサイクルに根ざす世界は変わらず，搾取され，隷従するだけである.
- ✓ 研究者は論文生産システムの家畜ではない.
- ✓ 新興世界は絶対にこの順番では展開しない！

